くにたち郷土文化館

国立市古民家へ行ってみよう！

くにたち郷土文化館

常設展示室には、くにたちの歴史や文化、自然について学ぶための展示があります。

国立市古民家（旧柳沢家住宅）

甲州街道沿いの青柳に建てられていた農家を、平成３年に移築復元したものです。（国立市指定有形文化財）

家の中には、むかのくらしで使われた道具がいっぱいあります。

「民具案内　むかしのくらし入門」

編集発行　くにたち郷土文化館
東京都国立市谷保6231番地
発行日　2010年12月28日
印刷　株式会社アトミ

この冊子は、平成22年度笹川科学研究助成実践研究により作成　助成者：齊藤有里加（くにたち郷土文化館）

・作成にあっては、民具案内関連企画展「むかしのくらし」展の内容に、新たに聞き取り調査した内容を加え作成した。また、くにたち郷土文化館で行われてきている、市内小学校３年生を対象とした「民具案内」における、くにたちの暮らしを記録する会の佐伯安子氏、北島清三氏をはじめ会員による解説内容を反映した。
・新たに加えられた貴重な地域のお話は、くにたちの暮らしを記録する会の佐伯安子氏、佐伯美子氏、北島マツ氏、青木紘一氏より伺い、聞き取りは民具再発見プロジェクト池田雅美、塩沢広介、内藤真理子により行われた。
・本文・編集は安齋順子が担当し、齊藤有里加・髙橋秀之（当館学芸員）が補佐した。
・イラストは内藤真理子が作成した。

問い合わせ先：くにたち郷土文化館　042-576-0211　http://www.kuzaidan.com/province/

民具案内

むかしのくらし入門

～明かりと暖房の道具を中心に～

くにたち郷土文化館

むかしのくらし

電気もガスもとおってない、そんなくらしを想像してみてください。
「夜は真っ暗だったかな？」
「寒い冬はどうしていたんだろう？」
「ごはんはどうやってつくっていたのかな？」
むかしのくらしは今よりも不便だったかもしれません。
しかし、そのくらしの中には、さまざまな工夫と知恵がありました。
私たちの生活にかかせない、明かりと暖房の道具を中心に、
むかしのくらしをのぞいてみましょう。

むかしのくにたち

いまの国立市は、むかしは谷保村とよばれていました。谷保村は甲州街道ぞいにある農家を中心にできていました。

甲州街道の北には畑が広がり、今の国立駅があるあたりは“ヤマ”といわれる雑木林が広がっていました。“ハケ”と呼ばれる崖線の下は、湧き水や府中用水など水に恵まれ、田んぼで稲を育てたり、川で魚をとったりしました。

大正時代のおわりごろの、くにたちの様子

※谷保村は昭和26年に国立町になり、昭和42年に国立市となりました。

ここでいう「むかしのくらし」は、主に明治から国立市になる昭和42年までをさします。

大正15年に国立駅ができた。
国立駅付近空撮（昭和２年頃）

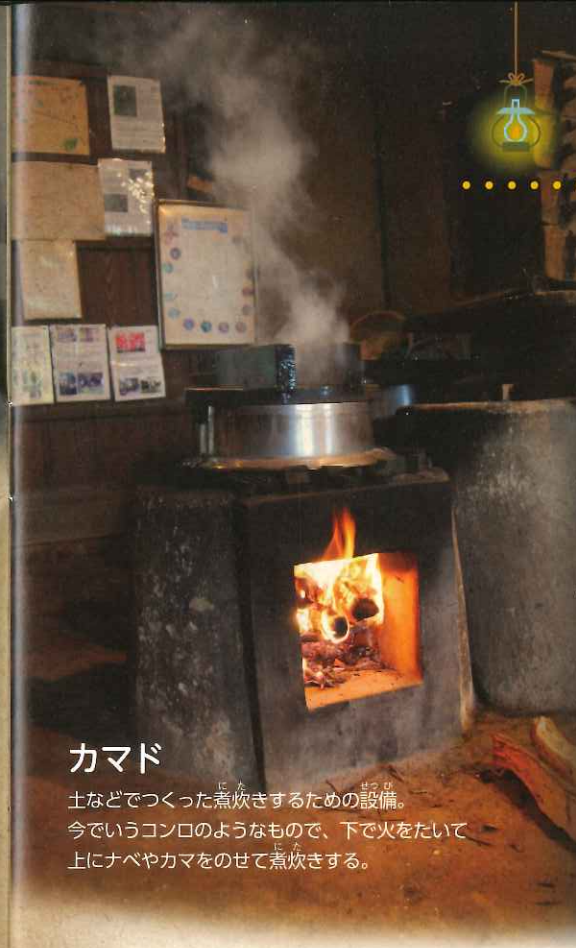
役場（市役所）付近には大きな建物もなく富士山が良く見えていた。
（昭和30年代）

火のあるくらし

火を発見したことで、人間の生活は大きく変わりました。明かりや暖房として使うだけではなく、料理をしたり、鉄や焼きものを作ることが出来るようになりました。

また、火は使い方をまちがえれば火事をおこし、人の命をもうばう怖さも持っています。

人々は火からもたらされる恵みと怖さを知り、火を大事にあつかいました。日本の家では、毎日食べものを作るカマドなど、火のあるところに神さまをまつったりしました。



カマド
土などでつくった煮炊きするための設備。
今でいうコンロのようなもので、下で火をたいて上にナベやカマをのせて煮炊きする。

荒神さま
カマドの神さまで、火事になるのをふせぐ神さまとしてカマドの上などにまつられた。

カマ
カマドの上にのせて、ごはんを炊く道具。

火を囲んで

むかしの農家には、イロリと呼ばれる火を燃やす場所が家の中心にありました。

イロリでは木や炭を燃やし、そこで家族は体をあたためたり、食べものを煮たり焼いたりしました。その火は明かりとして、人が作業をするためにも使われました。

火のまわりには家族があつまる光景がありました。

くにたちのヤマ（雑木林）には松の木がたくさんありました。大きな竿の先に鎌をつけて、パチンパチンとね、枯れ枝を取って、家に持って帰ってマキにしました。

きたじまきよぞうさんのお話

イロリ

むかしの家には、床の一部を四角に切りぬいて火をたくようにしたイロリがあった。燃料にはヤマからとってきたマキを使った。

（写真：国立市古民家のいろり）

燃料となるもの

火を長く燃やしつづけるには、燃やすもととなる“燃料”が必要でした。

食べ物を煮炊きするイロリやカマドでは、木を切ったマキが良く使われました。また、暖房の燃料には炭が多く使われました。それは炭に火をつけたときの火の力が強く長く安定して燃えつづけるためです。また、カマドなどでマキを燃やした後にできる、オキを暖房の燃料に再利用しました。

オキ（燠）

マキなどが燃えて炭火のようになったもの。よく暖房の道具の燃料として再利用した。また、火が消えたものは消し炭という。

マキ（薪）

木を手ごろな大きさに切ってマキにする。良く乾燥させたものを燃やした。

木炭

木を燃やしてつくられる燃料。薪とくらべて煙がほとんど出ない。

練炭

炭の粉をのりでかためた燃料。おだやかな火で長持ちした。

豆炭

「豆」の形をした小さな練炭。あんかやこたつで活やくした。

ろうそく

明かりに使われる「ろう」はハゼの実から絞り取った油などから作る。

明かりの燃料

電気やガスが登場する前、明かりをつけるために使われた燃料はロウソクや油などでした。江戸時代まではロウソクは高価なもので、ふだんは油を使うことが多かったようです。

菜種油

菜の花の種からとった油。菜種油より手軽に手にはいる魚の油もよく使われた。

火をつける

電気のないころは、明かりをつけるのにも、暖房の道具を使うにも、火をつけるという作業が必要でした。

マッチやライターがまだないころ、火をつけるには、火打ち石と火打ち金を打ち合わせ、火花をだして火を起こさなければいけませんでした。日本ではじめてマッチが作られたのは、明治のはじめごろで、その後、大正・昭和と家庭に広まりました。

火打ち石　火打ち金

火打ち石と火打ち金を打ち合わせて火花をだし、火をつける道具。石はかたい石を使った。

ホクチ（火口）

火打ち金と火打ち石から出した火花の火を大きくするためのもの。燃えやすい素材で、麻やガマの穂を使ったものなどがある。

付け木

松やヒノキの薄い木の端に燃えやすい硫黄をぬりつけ、火を他にうつすのに使った。マッチが普及してからは使用されなくなった。

マッチ

木の棒の先にリンなどの燃えやすい物質をつけたもの。

明かりの道具

あんどん

油やろうそくのあかりを中に入れて使う。和紙でまわりを囲い、風で火が消えないように工夫されている。

燭台

ろうそくを立てて使った。

手燭

ろうそくを立てて使った。手で持つところがあり、持ち運ぶことができる。

ランプ

石油を燃料にした明かりで、ろうそくの明かりに比べて、とても明るかった。

たんころ

中に油を入れて、灯心を中心に立て油をしみこませて使う。

弓張り提灯

中にろうそくを立てて外で使用した。

がんどう

いまの懐中電灯のようなもの。中にろうそくを立てて使う。回転しても、ろうそくが倒れないような仕組みになっている。

ランプは朝になると燃えカス、ススでホヤ（ガラス部分）が真っ黒になっちゃう。きれいにするには、そのホヤをはずして布でごしごしこすります。それは子どもたちの仕事でした。

夜の暗やみの中では、人はうまく活動することができません。木の枝や葉に火をつけて燃やすたき火やたいまつは、もっとも原始的な明かりです。

むかしの人は、この明かりをより明るく、より安全に使えるように、さまざまな工夫をこらしました。そして、長い年月をかけて風が吹いても雨が降っても消えない明かりを作っていきました。

暖房の道具

大むかしから火は、体をあたためてくれる大事なものでした。

むかしの日本の家は、ほとんどが木と土と紙でつくられていました。そのため夏はすずしく、冬はとても寒いものでした。むかしの暖房の道具では部屋全体はあたたまらず、火に直接あたることで寒さをしのいでいました。

火鉢

炭火を入れて体をあたためる道具。
「手あぶり」とも呼んだ。

ねこごたつ

炭火やオキ火を使って体を温める道具。上にふとんをかけて使う。

長火鉢

長方形の火鉢で、引き出しが付いている。

やぐらごたつ

炭火やオキ火を使って体を温める道具。上にふとんをかけて使う。

こんな道具もあったよ!

炭火の熱で服のしわをのばす。
いまの、電気アイロンのご先祖さま。

火ごて

火のし

炭火アイロン

ねこごたつを使ってみよう

～民具再発見プロジェクト～

むかしの事を良く知る佐伯安子さんと佐伯美子さん・北島マツさんに道具の使い方を教えていただきました。

1

まずは暖房の道具について、話をお聞きしました。

2

火ばしで、イロリからマキが燃えて炭になった状態のオキをとりだします。

3

4

ねこごたつは焼き物で出来ています。オキを入れるとじんわりとあたたまりはじめました。

5

ふとんをかけて足をいれてみよう。

あまったオキは火消しツボへ入れました。

6

あったか～い!

“民具再発見プロジェクト”とは?

むかしの生活の道具（民具）の使い方を知る人も、最近は少なくなってきました。そこで、民具が実際に働いているところを、地域の方から聞き取りをしたり、道具を実際に使って映像で記録をとったりしました。

写真は調査チームの大学生、内藤真理子さん、池田雅美さん、塩沢広介さんと話し手の佐伯安子さん、青木紘一さん（くにたちの暮らしを記録する会）

水のあるくらし

人間が生活する上でかかせない水。今、私たちは蛇口をひねれば水が出てくる水道をあたりまえのように使っていますが、水道ができるまでは、地面をほって地下水をくみ上げる“井戸”から水をえていました。井戸が家にない場合は近所の人と一緒の井戸を使ったり、川から毎日水を運んだりしました。

洗い場

川の水を使い、野菜や洗たくものを洗った場所。

水がめ

川や井戸からくんできた水をためる。料理や洗いものをするときに使った。

井戸

地面を深くほって、地下水をくみ上げた。水道ができてからもお風呂や洗たくにはよく井戸水を使った。

手桶

水を運ぶのは女の人や子どもの日々の仕事だった。

洗たくの道具

いまは電気で動く自動洗たく機で、一度に何枚もの服が洗えます。しかし、むかしは洗たくものを一枚ずつ手で洗わなければいけなかったので、着るものがよごれても、今のように毎日洗たくができませんでした。

洗たくをするのには、“たらい”と“洗たく板”を使いました。たらいに水を入れ、洗たく板でごしごしと洗たくものをこすりつけてよごれを落としました。

洗たく板

このギザギザ部分に、洗たくものを押さえつけながら、すべらすように上下にうごかす。

張り板

洗い張りといって、着物を着ていた時代は、着物の糸をほどいて洗たくしたあとに、糊つけをして板にはって乾かした。

たらいは、洗たくのために使うだけではなく、赤ちゃんが生まれると、産湯に使いました。大事な生活の道具として、嫁入り道具のひとつにもなっていたんですよ。

さえきやすこさんのお話

たらい

電気とガスの登場

谷保村に電気がくるようになったのは、大正4（1915）年より後のことです。はじめて電気がついた時、村の人が「電気はどこで油をそそぐだよ」と不思議がったという話も残っています。

しだいに電気やガスが人々の生活で使われていきました。しかし戦争中（昭和16年～20年ごろ）は敵の飛行機に見つからないよう、夜に明かりが家のまどからもれないように暮らさなくてはいけないなど、不便な時代もありました。

やがて戦争も終わり、昭和30年代に入るとガスが家庭で使われはじめます。また、洗たく機や冷蔵庫などの電化製品がぞくぞくと登場しはじめたのもこのころです。

電気スタンド

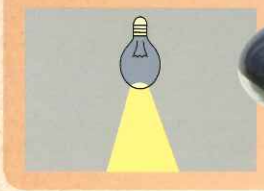
ガスランプ

家庭への電気が来た割合（全国）

おじさんなんかは、戦争中、夜はほとんど明かりがつけられなかった時代に生活し、明かりの道具って大事だなってしみじみ思いました。

灯火管制ってなに？

灯火管制用電球



灯火管制用電気の傘

戦争中、夜も敵の飛行機が飛んできました。家の窓から明かりがもれているとその明かりを目標に攻撃されました。そのため電球に布や紙でかさをつけて、横から光がもれないように工夫をしたり、また下にだけ明かりが出るようにした電球も使われました。

工夫のあるくらし

電気もガスもない時代の暮らしは、今とくらべると、手間と時間がかかり大変だったかもしれません。

しかし“大変”だからこそ、人と人がおたがいに助けあうことが大切にされました。そして、その“大変”からは“工夫”が生みだされました。

もっと使いやすく、もっときれいに、もっと安全にという人々の思いが道具を変え、生活を豊かにしていきました。

大八車

むかし、谷保天満宮の前の甲州街道は坂道になっていて、学校帰りの子どもたちは、知らない人の大八車でも「みんなで坂の上までおしてやろう」と大八車をおしてあげることがあったといいます。

（写真は郷土文化館　民具案内）

わらぞうり作りの様子

わらぞうり

むかしは、自分で使う道具を、自分で作ることがよくありました。たとえば、田んぼでお米を作ったあとに、のこった稲わらを使って“わらぞうり”を作りました。ほかにも、荷物をしばる縄やお米を入れるための“たわら”、お正月のかざりなど、稲わらだけでいろいろなものを作ることができました。

変わりゆくくらし

昭和30年代～40年代になると富士見台に団地が出来、谷保の田んぼだったところに高速道路が通るなど、村の景色はがらりと変わりました。

テレビや洗たく機などの便利な電化製品がぞくぞく登場したのもこの頃です。その一方で、いままで生活の中で使われてきた昔の道具は忘れられていきました。

写真：富士見台団地（昭和40年ごろ）

くにたち郷土文化館　収蔵庫の様子

くにたち郷土文化館では、昔のくらしを伝える道具たちが約5,000点収蔵されています。ひとつひとつ調べることで、くにたちの人々がどのようなくらしをしていたか、知ることができます。

くにたちの昔の道具を集めてくれたひとたち

使われなくなったむかしの道具が、たくさん捨てられていったのは昭和30年代～40年代にはじまった「高度経済成長期」からです。急げきに変わっていく暮らしの中で、第一小学校のPTAのお母さんたちが、むかしの暮らしの道具（民具）を集める活動をしたことがきっかけで、昭和54(1979)年に「国立市民具調査団」が結成されました。調査団は国立市内でお年寄りからむかしの話を聞いたり、民具を調べる活動を行ってきました。

1968年頃、第一小学校のＰＴＡのお母さんたちが、町を歩きながら、「今まで先祖が使っていた道具が捨てられているよ」「そうだ、そろそろ明治から100年だから『くらしの歩み展』をやろうよ！」と、お年寄りから話を聞いたり、むかしの道具をあつめたりしました。

元民具調査団の
さえきやすこさん

民具調査の様子

昭和61年

民具調査団はのちに「くにたちの暮らしを記録する会」と名前を変えて、いまも国立市古民家の年中行事や民具案内など、郷土文化館とともにさまざまな活動を行っています。

くにたち郷土文化館が出来てからは、地域の人がむかしの道具を郷土文化館へ持ってきたり、道具をどのように使っていたか教えてくれるようになりました。最近は、民具の使い方を知る人はだんだん少なくなっています。

くにたち郷土文化館に保存されている民具は、展示や小学校の学習などで、地域の歴史や文化を知る上で大切な資料となっています。

※民具とは、人々により生活の中で使われてきた道具です。